

接語重複と脱焦点化について*

赤羽 仁志

1. はじめに

文の情報構造については、久野(1978: 66)で次のような原則が働いていることが述べられている。

(1) 旧から新へのインフォメーションの流れの原則

そうでない理由がない場合には、文中の要素は、文末に近ければ近い程、より新しいインフォメーションを表わす。

久野は日本語と英語について論じながらスラヴ諸語やトルコ語にも言及しているように、同様の原則は日・英語に限らず言語一般に実際に当てはまる。(1)では、談話の中に組み込まれた任意の文において未だ聞き手に自明となっておらず、伝えられるべき情報的価値が高い要素を「新しいインフォメーション」と呼ぶが(ただし、指示は不定とは限らない)、しばしば情報焦点(information focus)とも称される。焦点には更に対照焦点(contrastive focus)あるいは同定焦点(identificational focus)と呼ばれるものがあるが、後者は情報焦点と区別されるものである。詳しくは Kiss (1998)¹等の議論を参照されたい。以下では特に断らない限り、単に焦点と言うときには情報焦点を指す。

文中には、また、焦点と相補的な要素が含まれる。つまり、焦点に対する前提(presupposition)の要素((1)の新しいインフォメーションに対しては古いインフォメーション)である。(1)の原則に従えば、前提要素は焦点に先行しなければならない。しかし、基底語順で(1)を充たすことが不可能となる場合があり、それを修復して情報構造を整えるように、構成素の配列を変換する(2)のような操作が様々な言語で観察される。

(2) [TP ... [$\begin{array}{c} \uparrow \\ \text{V} \ \underline{\text{X}} \ \text{Y} \end{array}$]] (V=動詞、下線=焦点)

動詞の直後に続く X が焦点であることが(2)では意図されているが、焦点ではない Y が X よりも文末に近い。このまま書き出し(spell-out)が適用されるならば、当然のことながら、(1)に抵触することになる。そこで、焦点位置を明け渡すように Y が動詞の前に移動することにより X が文末に位置付けられ、(1)を充たすことが可能となる。ロマンス諸語における短距離スクランブリングやスカンジナビア諸語における目的語移動(object shift)といったものは、焦点の解釈を受けるべきでない目的語等の動詞句内要素を(2)のように基底位置から移動させる現象と言える。(2)は(S-)V-O 言語の語順を取っているが、久野(1978)が述べるように動詞を考慮に入れる必要が無い場合には、同様のことが(S-)O-V 言語にも当てはまる。(2)のように図式化される

現象を、本論文では脱焦点化と呼ぶことにする。

脱焦点化の現象と認められるものとして、更にバルカン諸言語で観察される接語重複(clitic doubling)がある。その特徴としては、(3)のような語順を取り、焦点でなく前提の解釈を受ける直接目的語 DP が動詞の後に配置される。

(3) Subj Cl_i V DP_i (Cl=接語)

これは、一見、(1)の反例になると思われる。(3)の接語は目的語 DP に対応するものであるが、動詞に後続する目的語と独立したものとして動詞の前に基底生成するのであれば(cf. Kalluli (2008, 2009))、(3)は(1)と相容れず、また、脱焦点化とも無関係な現象に見える。しかし、接語の生起位置に注目すれば、(2)での移動先と関係付けて考えることが可能である。とすると、表面的には異なる現象であるが、接語重複とスクランプリング²の中に、脱焦点化という共通性が認められることになる。実際に、接語重複にも移動が関与しているとする分析は Sportiche (1996)を始めとする研究に見られ (Belletti (2005)参照)、(2)と(3)との比較は十分に妥当性があると思われる。では、(2)において脱焦点化のための移動が、文の周縁部ではなく、いわゆる中間領域をその移動先としているが、それはなぜなのか。本論文は、このような問題を、Chomsky (2000)以降のミニマリスト・プログラム(フェイズ理論)の枠組みを採用しつつ、特に接語重複における脱焦点化の統語的説明において論じようとするものである。

論文の構成は次の通りである。2節で、まず、脱焦点化の現象と見做されるバルカン諸言語の接語重複の特徴とその分析を振り返り、問題を提起する。3節では、フェイズ理論により、脱焦点化現象としての接語重複の分析を試みる。Chomsky (2001: 15)では、意味的に差異をもたらす可視的移動は狭統語部門に限定される。これを仮定すると、帰結として、当該現象に含まれる移動も狭統語部門の原理に従うことになる。目的語はそのように vP フェイズ極辺まで移動し、その位置で CP フェイズ主要部から [-Foc(us)]の素性値が付与がされ、脱焦点化が為されると主張する。4節では、接語重複が関係しないと思われる言語において類似の現象が部分的に観察されることを指摘する。具体的には、英語の叙実補文と脱焦点化との意味的な類似性から、一種の接語重複が起こると分析する。5節は、接語重複の種類が言語によりパラメタ化されることを提案する。また、脱焦点化に関与する接語重複とスクランプリングについて統一的な説明が可能であることを論ずる。6節は結論である。

2. 接語重複とその解釈

本節では、議論の中心となる接語重複を扱うが、接語重複の先行研究、取り分け、Sportiche (1996)及び Kalluli の一連の研究を取り上げながら、バルカンの言語に見られる脱焦点化現象としての接語重複の特徴を概観する。まず、次のような単純な接語化の例から始めよう。

(4) *Nombraron a María.* (スペイン語)

nominate.3PL.PST a María

‘They nominated María.’

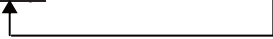
(5) *La* nombraron ____.

Cl nominate.3PL.PST

‘They nominated her.’

(4)における目的語 *a María* は、(5)では接語に置き換えられ動詞の直前に配置されている。換言すれば、このような単純な接語化では接語が基底位置に生起すべき項の欠如を補完しているのであり、このとき前者は一定の局所領域内で後者をC-統御する。それは、丁度、コピー(痕跡)を残しながら移動を行う、(6)に見られるような一般的な内部併合の場合と基本的には状況が異なる。

(6) *Mary* was nominated *t*.



このことから、Kayne (1975)以降の分析にも見られるように、接語化も移動により捉えることができる。

(7) *La* nombraron *t*.



接語化には移動が関与せず、基底生成によるとする分析もある(Jaeggli (1982)など)。しかし、Sportiche (1996)によって指摘されているように、接語化には移動の特徴を示すところがあり、そのような点で基底生成分析は問題があると言え、移動分析による方が合理的な説明が可能である。詳細についてはSportiche (1996)を参照されたいが、ここではこれを受け、単純な接語化には移動が関与するとしておく。

さて、次に接語重複についてであるが、ポルテーニョ・スペイン語³の例を挙げる。

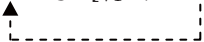
(8) *La*_i nombraron *a María*_i.

Cl nominate.3PL.PST *a María*

(≈ (4))

(5)の単純接語化と同様に、(8)においても目的語に対応する接語が動詞の直前に生起している。ただし、(5)とは異なり、先行する接語が後続の目的語と共起している。したがって、このような接語重複の場合、接語化を一般的な移動として捉えようとする矛盾が生じるように思われる。これについて、Sportiche (1996)は、凡そ(9)のような構造においてCl(itic)P(hrase)の主要部を接語が占めるのに対して、対応する目的語DP*は基底位置のV補部に具現すると分析する。

(9) [CIP DP[^] Cl [VP V DP*]]



DP*は、不可視的に(10)の「接語規準(Clitic Criterion)」を充たすべくCIP指定部(DP[^])に移動する。

(10) Clitic Criterion

i. A clitic must be in a Spec-head relationship with a [+specific] XP at LF

ii. A [+specific] XP must be in a Spec-head relationship with a clitic at LF

(ibid.: 263-264)

(10)の接語規準では、ClとDP[^]に移動するDP*の間に指定部・主要部関係が結ばれなければならないとする。しかしながら、現行のミニマリスト・プログラムにおいては、指定部・主要部関係はそれ自体概念的に何ら重要性を持たない。よって、本論文でも(10)を維持しない。(10)に包含されるより重要な問題として、接語化される項が指示について特定の([+specific])であるとされていることが挙げられる。接語化される項の指示が特定のあるいは定(cf. Anagnostopoulou (1999))でなければならないという条件は、上に挙げたスペイン語やルーマニア語(Gierling (1997)等参照)などロマンス語の方言における接語重複には当てはまるかに思われる。ところが、同じ様に接語重複が観察される言語でも、アルバニア語や現代ギリシア語(以下、単にギリシア語)といったバルカンの諸言語における直接目的語の接語重複⁴では、Kallulliの一連の研究で指摘されているように、特定のあるいは定であるということのみでは十分でない。(11)の対話文を見られたい。

(11) A: What happened?

B: Jan-i (#i) hëngri fasule-t / (#e) piu një birrë. (アルバニア語)

O Yánnis (#ta) éfaye ta fasólia / (#tin) ipje mia bira. (ギリシア語)

the Yannis Cl ate the beans / Cl drank a beer

‘Yannis ate the beans / drank a beer.’

(Kallulli (1999: 349))

(11A)の質問に対し、返答となる(11B)では直接目的語の指示が定(定冠詞はアルバニア語で名詞の後、ギリシア語で名詞の前)あるいは特定のであるが、接辞重複を伴う場合、適格な返答文とならない。このような事実から、ロマンス語の場合とは異なり、目的語が定あるいは特定のであれば必ず接語重複が惹起されるということではないことが分かる。

では、バルカンの言語における直接目的語の接語重複はどのように引き起こされるのだろうか。一般に、WH疑問文に対する返答文においては、WHに値を与える部分が焦点となる。上の返答文(11B)が適格となるときには直接目的語が焦点(の一部)となる。このことからKallulliは、直接目的語が焦点(の一部)となるような状況ではそれに対する接語重複が起こらないと論じている。Kallulli (2009)から更に次のような例を引用したい。

(12) a. I Ana ðjavase to vivlio. (ギリシア語)

b. An-a lexoi libr-in. (アルバニア語)

the Ann read the book

‘Ann read the book.’

(13) a. I Ana to ðjavase to vivlio. (ギリシア語)

b. An-a e lexoi libr-in. (アルバニア語)

the Ann Cl read the book

(14) What did Anna read?

-- (12)

--*(13)

(15) Who read the book?

--*(12)

-- (13)

接語重複を含まない(12a, b)は(14)の目的語 WH 疑問文に対する返答として適格な文となるが、(15)の主語 WH 疑問文に対する返答としては不適格な文となる。他方、接語重複を含む(13a, b)の各例は、(14)に対する返答として不適格であり、(15)に対する返答としては適格となる。このことから、Kallulli が論じているように、バルカン諸言語の接語重複は直接目的語が焦点位置に留まることを免れるように引き起こされる脱焦点化の現象と考えられる。この点において、(8)の焦点解釈を許すポルテーニョ・スペイン語などロマンス語の接語重複とは全く対照的であり、López (2009a)などが述べるように、表面的には類似しているものの、異なった現象と見做すべきであろう。この相違については、5節でその説明を試みる。

バルカン諸言語（アルバニア語、ギリシア語など）において、接語重複は脱焦点化の現象であるとする。Sportiche (1996)では、接語と不可視的に移動する目的語との間に指定部・主要部関係が必要とされた。また、Kallulli (2009)では、接語が Chomsky (2000 以降)の意味での探査子となり、その C-統御領域内で目標子となる目的語と一致を行うとする。両者の分析では、接語に言わば、脱焦点化された解釈、つまり、前提解釈を認可／付与する役割が与えられている。しかし、(1)のような原則が様々な言語に広く当てはまるといった一般性に注目するならば、目的語が可視的に文末位置、統語的には最も深く埋め込まれた位置を占めていることが目的語の焦点解釈にとって重要な意義を持つと思われる。とすると、問題とされる前提解釈は、接語が共起する基底位置の目的語に対して付与するのではなく、むしろ、他から接語の側に付与されているとも考えられる。接語が生起している位置は動詞の直前、即ち、vP フェイズ極辺（あるいは、それ以上の構造的な位置）であるが、そのような位置で前提解釈を受けるのは、次節でも見るように、接語重複以外の脱焦点化現象にも共通して当てはまる。この観点に立てば、接語が前提解釈を認可／付与される側の役割を担っていると考えられるのは妥当のように思われる。また、Sportiche (1996)に従い、接語化には何らかの移動が関与していると仮定するとしてみよう。脱焦点化のために目的語の移動が起こり、しかも、表面的には接語と基底位置の DP が重複して書き出されるのである。では、それはなぜか。以下では、そのような可能性を追究すべく、接語重複および脱焦点化に関係する現象についてフェイズ理論による分析を試みる。

3. 脱焦点化現象としての接語重複—フェイズ理論分析—

前節で見たように、バルカンの言語に見られる接語重複では、直接目的語が指示に関して定または特定のとなるが、これだけでは十分な特徴付けではなく、直接目的語の脱焦点化が伴わなければならない。この点については、Holmberg (1999)等で論じられているスカンジナビア諸語の特に弱代名詞の目的語移動とかなり近い特徴を示している。典型的な目的語移動の例を

見たい。

(16) a. Jag kysste [_{vP} henne_i inte [_{t_v} t_i]]. (スウェーデン語)

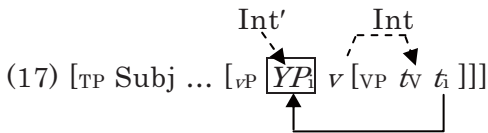
I kissed her not

'I did not kiss her.'

b. (*)Jag kysste [_{vP} inte [_{t_v} henne]].

(= (16a))

(16a)で、VP の周縁部に現れた否定副詞 *inte* との位置関係から、動詞と目的語が基底位置の VP 内からその外へ移動していることが分かる⁵。これについて、Chomsky (2001)はフェイズ理論による説明を与えている。Chomsky によれば、*v*に EPP 素性が付与されることにより移動が駆動され、目的語は *vP* フェイズ極辺に到達する。これにより、(17)に図示するように、目的語は主要部 *v*からその C-統御領域に対して為される Int(erpretation)素性の付与を免れ、その代わりに Int'素性が付与される。



Int は焦点に関する意味素性であり、それが付与されることにより焦点解釈が生ずる。逆に、Int と相補関係にある Int'素性が付与された場合には前提解釈が与えられると考えられ、脱焦点化がされたということに等しい。

このようなフェイズ理論における目的語移動の分析については、López (2009a)においてスカンジナビア語だけでなく他の言語にも適用され、例えば次のようなロマンス語に見られる短距離スクランブリングに対しても、ほぼ同様の分析の可能性が示されている。なお、例文は López (2009b)から引用したものであり、例文中の下線は焦点であることを示す。

(18) a. Ayer compró Ana el libro. (スペイン語)

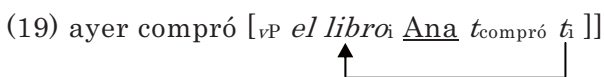
yesterday buy.PAST.3SG Ana the book

'Yesterday, Anna bought the book.'

b. Ayer compró el libro Ana.

(≈ (18a))

(18a)を基本語順の文として、スクランブリングの結果得られたのが(18b)である。このとき、スクランブリングによる併合先は *vP* フェイズ極辺である。



脱焦点化を伴うこのような移動を、Zubizarreta (1998)は韻律的に動機付けられた移動 (*p-movement*)であると分析する。つまり、中核強勢位置である文末と焦点の位置とが一致しないとき、非焦点要素の移動が引き起こされるとする。が、López (2009a)が指摘しているように、実際にはこのようなスクランブリングが韻律上の理由により駆動されているのではないことは

次のような例により確認できる。

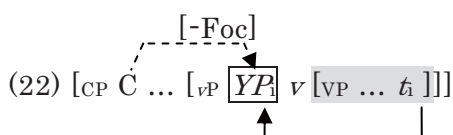
- (20) a. Le di a mi hermana dos pimientos para mi madre.
 Cl.dat gave.1sg DAT my sister two peppers for my mother
 ‘I gave my sister two peppers for my mother.’
 b. Le di [dos pimientos]_i a mi hermana _ti para mi madre.

(20a, b)の何れにおいても、焦点となる(para mi) madre が文末の中核強勢位置に現れている。したがって、スクランブリングによって解消されるべき不一致は生じていない。

López は、むしろ、このスクランブリングが vP における指定部・主要部関係を介した形式素性の照合のために駆動され、vP 指定部の位置を占めるということにより [+a(naphor)]素性が付与されて、前提的な解釈が得られると主張する。この分析で López は「フェイズ」の概念を用いている。が、スクランブリングによって vP 指定部に移動した要素が探査子となり、逆に本来、探査子として機能するはずの vP フェイズ主要部を目標子として一致が行われるとする点で標準的なフェイズ理論からの逸脱が指摘される。また、既に触れた通り、旧来の指定部・主要部関係は同理論で意味を持たない。問題となるスクランブリングについてフェイズ理論の枠組みによりその根本的な動機付けを与えるのであれば、v の C-統御領域内から vP 極辺へ抽出されることによってもたらされる狭統語部門内でのその後の計算に対する効果に注意が向けられるべきであろう。vP 極辺まで移動がされていれば、Chomsky (2000 以降) で提案される「フェイズ不可侵性条件(Phase Impenetrability Condition/PIC)」に基づき、その外側に続く CP フェイズの主要部 C から一致を受けることが可能となる。ここでは PIC を次のように定義しておく。

- (21) フェイズ α は、その極辺を除き、 α の外部にある要素から接近不可能である。ただし、 α は CP または vP で、極辺はその指定部及び主要部とする。

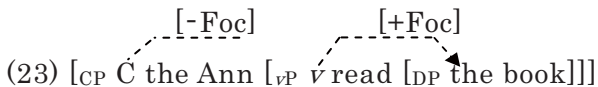
(17)で図示したように、Chomsky (2001)では v の C-統御領域内に Int が付与され、その外部では Int'が付与されるが、Int をより具体的に[+Foc(us)]、Int'を[-Foc]と呼ぶことにする。[+Foc]は、vP フェイズ主要部 v が探査子となって v 自身の解釈不可能素性に関し一致を行った結果、目標子の持つ値未指定の解釈可能素性[uFoc]に値付与がされたものである。全く同様な仕方で、[-Foc]は、CP フェイズ主要部 C が探査子となって C 自身の解釈不可能素性に関し一致を行った結果、目標子の[uFoc]の値付与を行ったものとする。[+Foc]と[-Foc]、何れの素性値付与においても PIC により制約が課される。このため、[uFoc]が負の値を付与されるには、目標子となる要素が少なくとも vP フェイズ極辺まで到達していなければならない。この[-Foc] (結果として前提解釈) が付与される仕組みを図示すれば(22)のようになる。



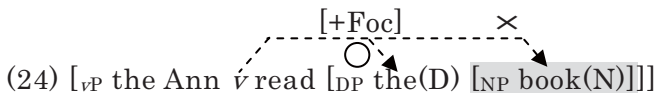
前提解釈が動詞句の外側で与えられるという議論は、Diesing (1992)など、従来からあるが、

それは[-Foc]が *vP* フェイズの外、つまり、*CP* フェイズで与えられるとする本主張と合致する。

さて、ここでバルカン言語に見られる直接目的語の接語重複に戻ろう。接語重複が起こっていないならば、目的語に焦点的な解釈が与えられることは既に前節で見た。これは、フェイズ主要部(*v*, *C*)が *PIC* に従ってその *C*-統御領域内の要素と一致を介し素性値([+Foc], [-Foc])を付与することから説明がされる。つまり、接語重複が無ければ *VP* の外に目的語が移動していないと考えるため、*v*が目的語に対し[+Foc]を付与することが許され、*C*からの[-Foc]付与は *PIC*により阻止されるのである。(12)の例における一致を介した素性値付与を(23)に示す。ただし、提示のため、ギリシア語／アルバニア語を英語に置き換えている。

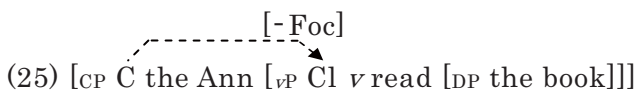


[+/-Foc]の素性値を付与されるのは、厳密には *DP* 主要部であり、その補部ではない。接語重複が定性／特定性と密接に結び付くという事実はここに帰着すると思われる。仮に *N* が[*uFoc*]を持てたとしても、Svenonius (2004)や Bošković (2005)などのように *DP* もフェイズであるとする議論がある。本論文でも *DP* をフェイズと仮定すると、*PIC* の定義から、*DP* フェイズ極辺にある要素までがその外部にある *v*から接近可能となる。

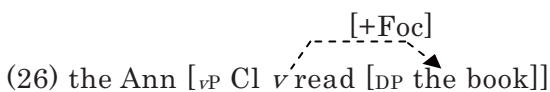


このことにより、*D*の補部 *N* に対しては *v*から[+Foc]が付与がされない。また、主要部 *D*が素性値[+/-Foc]を付与されていれば、*DP*全体がその素性値を付与されるとする。

では、(13)で見たような接語重複の場合はどうか。表面上、目的語の基底位置から移動が起こっていないという点では、(12)の場合と共通している。しかし、(13)では前提解釈([-Foc])が与えられることがその弁別の特徴であった。この解釈については、*vP* フェイズ極辺に生起する接語に注目することによって、それを自然に導くことが可能と思われる。(25)は(13)のギリシア語／アルバニア語を英語に置き換えたものである。



(25)では、目的語に対応する接語 *Cl* に対し、一致の結果として *C*が[-Foc]を付与する。よって、目的語の前提解釈が得られる。ところが、(25)には問題がある。もし、接語が目的語とは独立に直接 *vP* に併合されているのであれば、目的語は基底位置で *v*から[+Foc]を受けることができ、それを妨げるような理由は何も見当たらない。



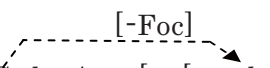
事実と矛盾するこの状況も問題であるが、そもそも、接語と目的語が意味解釈上、必然的に結び付けられなければならないのはなぜか。その説明として、(9)で示した Sportiche (1996)にお

ける接語重複の派生法を再度取り上げたい。Sportiche は、接語化においては VP を支配する機能範疇 CIP の指定部へ目的語が移動し、特に接語重複では、この移動が不可視的であるとす。移動した目的語と音形を持つ CI が指定部・主要部関係を成すことにより、両者は結び付けられた。が、ここでは Sportiche のように目的語に対応する接語を CIP 主要部の具現として見るのではなく、接語は *vP* 極辺への移動でできた目的語のコピーのうち、移動先のコピーの一部が具現したものと考える。一方、移動元のコピーは完全に具現する。そこで、[+/-Foc] の付与に関し、次のような仮説を立てることとする。

(27) 移動元のコピーは見えない。

これにより、(25)に示したように移動先の CI の位置でのみ[-Foc]の付与が行われ、期待される前提解釈が得られることになる。(27)は、移動によって形成される連鎖に対して作用域等の意味解釈を決定する際に一般に働くものと思われる。

この分析が正しいとすると、次の問題として、接語重複では移動先で DP が完全には書き出されず接語としてしか具現しないのに対し、移動元では完全な書き出しが行われるが、それはなぜだろうか。可能性として、一種の経済性にその答えを求めることができるように思われる。つまり、目的語が[-Foc]を付与されていることは音韻的に最小限に標示されていれば十分であり、それ以上は不経済と見做されるのである。したがって、目的語 DP は移動先の *vP* 極辺で [-Foc]が与えられる主要部 D のみが書き出されることにより、意図される解釈が標示できる。

(28)  [CP C the Ann [*vP* [~~DP the book~~] *v* read [DP the book]]]

バルカンの言語における接語重複では、特に接語が DP 主要部を占める定冠詞と同形態であることから、この主張は動機付けられる⁶。ところで、(28)において[-Foc]付与に関与しない D の補部は移動元で書き出されると考えられるが、(29)に例示するいわゆる WH 移動のように移動先と移動元で厳密な相補削除が起こらない。

(29) John wondered [CP [DP which picture of himself] Bill saw [DP which picture of himself]].

PF: ... [CP [DP which picture of himself] Bill saw [~~DP which picture of himself~~]]

LF: ... [CP [DP wh ~~x~~ picture of himself] Bill saw [DP wh x picture of himself]]

(29)では、まず、PF 側の出力で移動先コピーの DP が完全に書き出され、移動元コピーは完全に削除される。このことから、音韻素性は相補的な削除が行われていると言える。更に、LF 側の出力でも意味解釈の必要から、移動先コピーの構成要素は純粋な *wh* 演算子だけを残し、移動元コピーの構成要素は *wh* 演算子以外が残されるようにやはり相補削除が行われている。移動が関与する場合にはこのような相補削除が適用される。ならば、接語重複にも移動が関与しているとすると、その書き出された結果は(28)ではなく(30)のようになると予測される。

(30) *The Ann [DP *the*] read [DP book].

しかし、その予測は正しくない。これについては、[-Foc]付与の対象となるためには指示が定／特定のであることが必須条件であり（逆は真でない）、更に定／特定のであるためには VP 内の移動元コピーの主要部 D によって標示されなければならないといった要求があると思われる。次のギリシア語の例を見られたい（同じことはアルバニア語にも当てはまる）。

(31) a. I Anna ithele na (to) aghorasi ena forema.

the Ann wanted to Cl buy a dress

b. I Anna ithele na (*to) aghorasi forema.

the Ann wanted to Cl buy dress

‘Ann wanted to buy a dress.’

(Kallulli (1999: 352))

(31a)では目的語の D が不定冠詞 *ena* として具現しており、動詞前の接語 *to* は共起してもしなくても良い。共起している場合には、目的語の指示は特定のであり前提解釈が与えられるが、共起していない場合には、目的語は特定性と無関係に焦点解釈が与えられる。一方、(31b)では目的語の D が具現していないが、この場合、動詞前の接語は共起し得ず、また、その解釈は非特定のな存在解釈でしかあり得ない。後者は、(32)に挙げる焦点化構文で文頭に前置された無冠詞目的語にも共通する。

(32) Gazetë ka·m lexuar dja. (アルバニア語)

newspaper have-I read yesterday

‘It was a newspaper that I read yesterday.’

(Kallulli (1999: 353))

以上のことから、形態的に補部と独立して具現できる D を持ち、且つ、(目的語が) 定／特定のであることを標示する D の生起が義務的な言語では、接語重複が存在する可能性がある。より詳細な検証が必要であることは言うまでもないが、ここまではバルカンの言語ばかりでなく、ポルテーニョ・スペイン語のようなロマンス語にも共通して当てはまるように思われる。それに加え、CP 主要部から[-Foc]の付与が可能となる位置 (vP 極辺) で目的語 DP の最小限の、つまり D のみの書き出しが許される言語であれば、脱焦点化の一形態である接語重複が生じ得ると考えられる。これはバルカンの言語には当てはまるが、ロマンス語には当てはまらない。この異なる言語における接語重複については5節で立ち戻る。

4. 英語における接語重複

これまでバルカンの言語に見られる脱焦点化現象としての接語重複について論じてきた。このタイプの接語重複においては[-Foc]が付与される位置へ DP の移動が起こり、付与の結果が移動先で最小限に顕在的に標示されることにより前提解釈を導く。本節ではこのような接語重複とは一見、無関係と思われる英語の現象について考察し、上で提案した分析により説明を加えることにしたい。初めに次の例を見よう。

- (33) a. I think [that the double-digit inflation is here to stay].
 b. *[That the double-digit inflation is here to stay] I think.
- (34) a. I regret [that the double-digit inflation is here to stay].
 b. [That the double-digit inflation is here to stay] I regret.

(Horn (1981), Stowell (1981))

(33)-(34)の対比で示されるように、believeのような非叙実動詞は補文が話題化されることを許さないのに対し、regretのような叙実動詞は許す。話題化では多くの場合、前提とされる構成素を文頭に置く。叙実動詞は、非叙実動詞と異なり、その補文の内容を既に事実であるとするので、叙実補文の解釈は前提的である。したがって、叙実補文は話題化と前提性において整合するが、非叙実補文は矛盾するため、(33b)と(34b)の相違が出現する⁷。前提解釈がされるという点では[-Foc]との関係が考えられるが、前提とされる補文自体は話題化の場合を除いて叙実動詞に後続し、文末に生起する。文末が焦点位置であるならばバルカンの言語の接語重複と比較し得る脱焦点化が起こることも期待されるが、実際にはどうであろうか。

英語の非叙実補文と叙実補文の相違について、もう1つ次のような事実を考えたい。

- (35) *John believes *it* [that she has left].
- (36) John regrets *it* [that she has left].

非叙実補文では(35)のように補文標識 *that* の直前に代名詞 *it* が生起することがないのに対し、叙実補文では(36)のように *that* に先行して *it* の生起が可能である。叙実補文と *it* の共起については、それが常に可能な訳ではない。(37)-(38)では、焦点副詞 *even/only* が非叙実動詞、叙実動詞それぞれの直前に置かれている。

- (37) I {even/only} think that she has left.
- (38) I {even/only} regret that she has left.

Jackendoff (1972)、Reinhart (1983)等が述べているように、焦点副詞はその C-統御領域内の要素に焦点解釈を与えるので、(37)-(38)では動詞に続く補文に対しても強制的に焦点（対照焦点）の解釈が付与されると考えられる。ここで、(38)と、(36)同様 *it* を含む(39)を比較されたい。

- (39) *I {even/only} regret *it* that she has left.

母語話者の判断によれば、焦点副詞が付加された場合、(39)のように、叙実補文の直前に *it* を挿入することは不可能である。*it* は叙実補文に前提解釈が与えられていることを顕在的に標示するものと考えられ、そうだとすると、焦点解釈を強制する焦点副詞とは相容れないことから(39)の非文法性が導かれる。なお、前提解釈を顕在的に標示するとは、そうしなければ焦点解釈が与えられてしまう要素を脱焦点化しているということに他ならない。

では、叙実補文の直前に生起する *it* はどのように説明されるべきか。Kiparsky and Kiparsky

(1970)は、叙実補文が(40a)のような複名詞句構造を取ると分析し、(36)に見られるような叙実補文に先行する *it* の生起はこの構造から導かれるとした⁸。

(40) a. [NP [NP *the fact*] [s that John is ill]]

↓

b. [NP [NP *it*] [s that John is ill]]

(40)では複名詞句中の主名詞句 *the fact* が *it* と置換されている。が、この分析は、Melvold (1991) が指摘するように、次のような構成素テストによって退けられる。

(41) a. *John regrets [*the fact terribly* [that he offended Mary]].

b. John regrets *it terribly* [that he offended Mary].

文中に主節動詞を修飾する副詞が生起するとき、その副詞は補文を含む複名詞句内には現れないと考えられる。予測通り、(41a)のように複名詞句の主名詞句 *the fact* と補文の間に主節 VP 副詞 *terribly* を挿入することは許されない。そこまでは、複名詞句が単一構成素を成すとする(40a)の分析は正しいと思われる。ところが、*it* が補文を導く(41b)については主節 VP 副詞の介入が許される。このことから、*it* と補文は(40b)の構造に示されるようには単一の構成素を成していない。

叙実補文の前提解釈が CP フェイズ主要部から[-Foc]を付与されて脱焦点化された結果とするならば、前節で見たバルカン語の接語重複のような派生過程が考えられる。

(42) [CP C i Ana [vP [DP to ~~[NP *vivlio*]]] v [VP òjavase [DP to *vivlio*]]] (= (13a))~~

[-Foc]を付与される目的語は、移動元では補部を含め DP 全体が書き出されるが、移動先の vP フェイズ極辺では[-Foc]が付与されていることを最小限に示すため D のみ書き出される。したがって、vP 極辺に移動する要素が主要部 D を持っているということがこの接語重複の必須条件である。Kiparsky and Kiparsky (1970)は叙実補文が複名詞句を成すとしたが、この複名詞句についてより最近の Kayne (1994)の分析を取り入れれば、(43)のような DP 構造となる⁹。

(43) [DP e(= D) [CP that ...]]

ただし、(43)では D を空決定詞 *e* が占めているとする。(42)の派生及び(43)の構造を仮定することにより、叙実補文 DP を vP フェイズ極辺に移動させて(44)が得られる。

(44) [vP [DP e [CP that ...]] I v [VP regret [DP e [CP that ...]]]]

この段階では、移動元のコピーと移動先のコピーでそれぞれ *that* 節を空決定詞 *e* が導いている。次のフェイズ、つまり、CP フェイズに到達したとき、その主要部 C から PIC に基づいて移動先コピーに対し[-Foc]が付与される。

(45) $[\text{CP } \overset{[-\text{Foc}]}{\text{C}} \text{ I } [\text{vP } [\text{DP } e [\text{CP that ...}]] \text{ v } [\text{VP regret } [\text{DP } e [\text{CP that ...}]]]]]$

[-Foc]を付与されたとき、この素性値を顕在的に標示することが必要になると上で述べたが、DP 主要部の *e* は音形を持っていない。また、その補部となる C(P)は、[uFoc]を持ち得るとしても、DP をフェイズと仮定したことによりその外側のフェイズ主要部から[-Foc]を付与されることはない。

DP 分析においては、人称代名詞も D の位置を占めるが(注 6 参照)、Harley and Ritter (2002) や McGinnis (2005)等 (古くは Benveniste (1966)や Jakobson (1971)) にも論じられるように、人称代名詞のうち ϕ 素性の指定が最も少ないのは 3 人称であり、3 人称代名詞の中、中性単数代名詞が様々な言語において虚辞としても用いられている (英語の *it*、ドイツ語の *es*、フランス語の *il* など)。この意味において、3 人称中性単数代名詞は D の最小限の顕在化と言える。そこで、次のような仮定をする。

(46) 最小限の ϕ 素性指定を持つ空決定詞 *e* は、[-Foc]を付与されたとき、そのときのみ、PF で顕在化される。

つまり、空決定詞 *e* は本質的に 3 人称中性単数代名詞と同程度の ϕ 素性指定を持つが、音韻素性については未指定のため、[-Foc]の付与がされた場合、英語では *it* という音形が与えられ顕在化するのである。なお、前提解釈に参与する *it(e)*は、純粋な虚辞とは区別されるべきである。純粋な虚辞は、一般に、意味内容を全く持たず、文の意味解釈に貢献することがない。さて、[-Foc]付与による *it* の具現は移動先のコピーのみで起こり、CP フェイズ主要部からは探査し得ない VP 内にある移動元のコピーでは起こらない (後者では(27)により *v*からの[+Foc]付与も起こらない)。結果として、*that* 節とそれに先行する *it* は構造上、叙実補文 DP の異なる生起 (コピー)の中に具現しているため、それらは単一の構成素として具現していないと言え、(41b)の説明が付く。

顕在化する *it* の生起位置については問題が残る。叙実補文 DP が基底位置で *that* 節と具現し、移動先で *it* として具現するわけであるが、(47)に示す通り、線形順序としては動詞を挟むように「... *it* V *that* ...」となることが期待される。が、実現するのは(36)のように「...V *it that* ...」の順序である。

(47) *John *it* regrets [that she has left].

(36) John regrets *it* [that she has left].

これについては英語の弱形の人称代名詞が接語であり (Farrell (2005)等)、しかもそれが前接語であるためと考える。以下の例からも分かるように、弱形 (目的格) 代名詞は動詞の直後に隣接していなければならない。

(48) a. *I will call up *them/em*.

b. I will call *them/em* up.

(49) a. *I will call up *it*.

b. I will call *it* up.

叙実補文 DP が vP 極辺への移動後、動詞に編入され、具現した *it* の形態的特性から編入先の語の末尾に配列されるとすれば、(48)-(49)の a.が排除され b.が得られるのと同様、(47)が排除され(36)が得られる。

叙実補文には接語 *it* が伴う(36)のような場合と、伴わない(34a)のような場合がある。前者には vP 極辺への移動が関与し、空決定詞が[-Foc]を付与されることにより *it* が生ずるとしたが、後者についてはどうか。 vP 極辺への移動があるとすると、やはり、*it* が現れることになる。Chomsky (2001)によれば、 vP 極辺への移動は随意的であるとされている¹⁰。そこで、叙実補文 DP の移動も随意的であると考え。移動のない場合、CP 主要部から vP フェイズ内に埋め込まれた補文に[-Foc]が付与されることは、PIC から禁じられる。

(50) $\begin{array}{c} \text{---[-Foc]} \\ \text{---} \\ \text{---} \\ \text{---} \\ \text{---} \end{array} \parallel$
[_{CP} C I [_{vP} v [_{VP} regret [that ...]]]]

一方、基底位置に留まった叙実補文がもし vP 主要部から[+Foc]を付与されるとすると、焦点解釈がされるという矛盾が生じてしまう。しかし、DP をフェイズとすると、 v による[+Foc]付与はやはり阻止される。

(51) $\begin{array}{c} \text{---[+Foc]} \\ \text{---} \\ \text{---} \\ \text{---} \\ \text{---} \end{array} \parallel$
[_{vP} I v regret [_{DP} *e* [_{CP} that ...]]]

(51)に示したように、(43)の分析は矛盾した解釈も適切に排除する。叙実補文 DP の主要部を占める *e* は v から接近可能な位置にあるが、この *e* は(46)の規定により[-Foc]を付与されたときのみ顕在化するとするならば、[+Foc]を付与されてもその証拠が残らず、焦点解釈にも繋がらない。よって、叙実補文 DP への[+Foc]付与の可能性は消滅する¹¹。では、接語 *it* の伴う場合と伴わない場合の解釈上の相違は何か。これについてはやや判然としないところもあるが、接語の具現によって補文が前提であることが明確にされているものと思われる (Bolinger (1977) 参照)。

以上、英語においても叙実補文で接語重複が起こるとした。叙実補文は(43)のように DP の構造を取り、その中で主要部 D は CP を補部にとると仮定した。D はより一般的に補部として NP を選択する。NP を補部とする D は補部の側に付着し支えられるが、接語の D はむしろ逆にそれを補部として選択する主要部の側に付着する。接語重複の場合には、D は接語であるのと同時に補部を取る。バルカンの言語やロマンス諸語の中にはこのような性質を備えた D を持つものがあるが、英語はこれに相当するものを持たないように見える。しかし、空決定詞 *e* が CP を補部選択し、接語 *it* として顕在化すると考えれば、やや例外的ではあるが、英語でも接語重複が許されることになる。叙実補文を含む構造以外での接語重複については今後の検討が必要である。

5. パラメタ

前節では、バルカン語の接語重複と比較されるような現象が、そのような現象とは無関係と思える英語にも存在する可能性を指摘した。バルカン諸言語でも英語でも、同じ方法で[-Foc]の付与が行われ、その結果として前提解釈がもたらされた。接語重複には、このような脱焦点化の効果を持つものがある一方で、それとは別種のものも存在することを既に見た。ロマンス語の一部の方言においては、接語重複が脱焦点化ではなく反対の焦点化の効果を持つ。本節では、まず、このような表面的に類似した現象について説明を試みる。更に、脱焦点化現象として接語重複はスクランブリングと共通するところがあるが、両者の関係をパラメタにより捉えることを提案する。

2節でも触れたように、接語重複はロマンス諸語の一部の方言でも見出される。しかし、それは焦点化の効果を持つものである。ポルテーニョ・スペイン語の例を再録しよう。

(8) *La_i nombraron a María_i.*

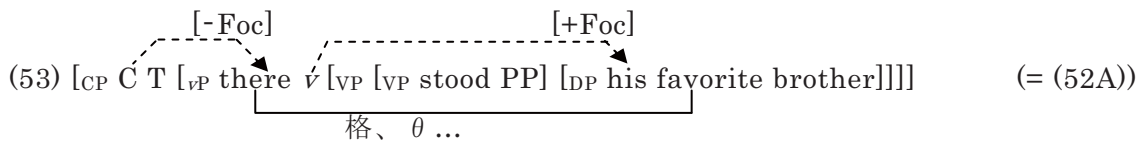
(8)で動詞の前に付加された接語 *la* は対応する目的語を重複させたものであり、 vP 極辺で最小限に書き出された **D** であるとする、やはりこの **D** は[-Foc]が与えられると期待される。しかし、この接語重複で得られる解釈は対応する目的語が焦点であるというものであり、接語重複と脱焦点化は必然的に結びつかない。気付かれることとして、(8)は(1)の旧から新へのインフォメーションの流れの原則に従う。このことから、(8)の接語は、対応する目的語と結び付いてはいるがそれ自身には実質的な意味は無く、言わば虚辞的なものであるとも言える。英語の虚辞 *there* を引き合いに出せば、(8)の接語は(52A)における *there* に匹敵する。

(52) Q: Where did his favorite brother stand?

A: #There stood beside him his favorite brother.

(Schütze (1999))

(52A)のいわゆる提示文では、主語位置を占める虚辞 *there* に意味解釈上の役割は無い。それに対し、文末に置かれた主語項 *his favorite brother* は焦点となるため、(52Q)の疑問文の返答として許容されない。このような文について Chomsky (2001)は、主語項が右方移動されていると分析し、この移動規則を「主題化／外置(TH/EX)」と呼んでいる。Chomskyによれば、TH/EXは音韻部門で適用される。しかし、(52)の事実でも明らかのように、規則の適用が意味に作用するため、Svenonius (2000)、Holmberg (2002)、Rezac (2006)等が論じているように、TH/EXは音韻部門でなく、意味部門に接続する狭統語部門の計算に還元されるべきである。一般に右方移動は禁じられるとすると、(52A)では主語項が v の **C**-統御領域内に直接付加され、その位置で v から[+Foc]を付与されるとしてみる。一方、虚辞 *there* は vP 極辺の位置に基底生成され、それ自身が対応する主語項に対しての探査子となり、一致を介して θ 役割を含め素性を主語項と共有することになる。T から付与される主格も *there* から主語項に転送される。また、*there* は CP フェイズ主要部から接近可能な位置にあるため[-Foc]が付与される。



虚辞は意味解釈に不要であるため、書き出しの際、[-Foc]と共に削除されるとする。その帰結として、 v から付与された[+Foc]により文末に置かれた主語項の焦点解釈のみが残る。(8)で接語 1a が英語の *there* に近い特徴を有しているとする、(53)に示した分析をロマンス諸語の接語重複に適用することができるように思われる。が、接語 1a は純粋な虚辞と違って対応する目的語と一致する ϕ 素性指定を持ち、その生成の仕方や意味解釈については単なる虚辞と区別される可能性がある。

(8)の派生を考える前に、異った接語化のされ方が保証されるため、接語となる D を素性によって区別する。まず、D が移動先の vP 極辺で最小限に書き出されるための条件として、D は接語素性[Cl]を持つとしよう。この素性を持つ[Cl]D は、 vP 極辺でのみ接語の書き出しが行われ、基底位置では何も書き出しがされない。これは、後接語、前接語を問わず、単純な接語化に当てはまる。一方、接語重複に含まれる接語はそれ自身 vP 極辺で書き出しがされるのに加え、基底位置の実質的な DP (コピー) に結び付けられるという点で虚辞に似た性質を持つ。この意味において、脱焦点化、焦点化を問わず、接語重複の D は虚辞的接語素性[Cl_{exp}]が与えられていると仮定する。[Cl_{exp}]D は[Cl]D と区別され、前者のみが接語重複を許される。また、D が[Cl]と[Cl_{exp}]の何れを与えられるか、あるいは何れも与えられないかは言語によって異なり、単純接語化と接語重複を持つバルカンの言語やロマンス諸語においては[Cl_{exp}]D と[Cl]D の何れも存在する。英語では、弱形の人称代名詞には[Cl]が与えられるが、CP 補部を取る空の D には[Cl_{exp}]が与えられる。

2種類の接語重複について、両者の相違は、[Cl_{exp}]D が接語として書き出された後、音韻素性以外の内容を維持するか否かである。脱焦点化を伴う接語重複の場合、接語は移動によって生じるとした。接語として具現する移動先のコピーが[-Foc]を付与され、それが意味解釈まで残る。他方、焦点化を伴う接語重複の接語は、虚辞の *there* とほぼ同様、意味解釈にとって維持される必要がないように思われる。が、上で触れたように、 ϕ 素性指定で純粋な虚辞とは異なるため、*there* のように直接に基底生成されるのではなく、目的語項の基底位置から移動され、移動先のコピーが最小限に書き出されているとも考えられる。書き出しと共に音韻素性以外の内容は消され、移動元コピーのみが意味解釈のために残る。2種類の接語重複を区別するため、次のようなパラメタを導入しよう。

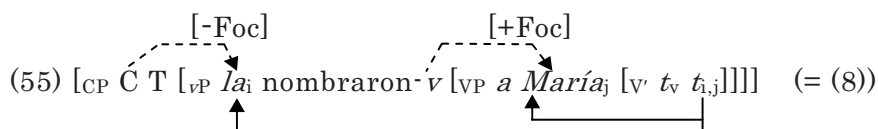
(54) 接語重複パラメタ：

書き出し後、移動先コピーで[Cl_{exp}]D の音韻素性以外を維持 {する/しない}。

[Cl_{exp}]D を有し、(54)のパラメタを肯定的値に設定する言語であれば、脱焦点化に接語重複を用いる言語となる。逆に、否定的値に設定する言語であれば、焦点化に接語重複を用いる言語となる。

ここで(27)の仮説を思い出されたい。(27)によれば、移動元コピーは[+Foc]の付与に不可視で

ある。もし焦点化の接語重複に移動が関与しているとするならば、(54)のパラメタで否定的値を選んでいても焦点化の効果は得られない。その解決策として、焦点化の接語重複では TH/EX が同時に起こっているとする。ただし、TH/EX は右方移動ではなく VP 指定部への左方移動と捉え直される。TH/EX の移動と共に V-to-*v* 移動が起こっているとして、焦点化の接語重複は(55)の派生を取る (TH/EX により音形を持つ他の要素が交差された場合は、PF の調整規則が適用される)。



VP 指定部への移動は、Chomsky (2008)に従って、*vP* フェイズ主要部の素性が *V* に継承されて引き起こされたものである。Chomsky は、同一主要部の異なった素性によって駆動される異なった種類の移動は同時並行的であると主張する。これを受け入れると、*vP* 極辺への接語化の移動も *vP* 主要部の素性によるものであって、同じく *v* の素性による TH/EX とは同時に行われることになる。それが意味するところは、(55)における *Ia* と *a María*、それら自身、1つの移動の2つのコピーではなくなり、[+Foc]の *a María* への付与が(27)によって阻止されないということである。加えて(54)のパラメタを否定的値に設定することで、接語に付与される[-Foc]は意味解釈まで残留せず、接語と結び付けられる目的語項に前提解釈が与えられることもない。では、なぜ、焦点化のため接語重複がされるのか。接語の生起は意味解釈上、不要な要素が混入することになり、意味の計算にとっては不経済に違いない。が、敢えて経済性を冒すのは、語順上では焦点化が起こっていることが明確でないので、それを明確に標示するためと考えられ、一種の最終手段と理解できる(ただし、目的語・動詞一致のような他の可能性も残される)。

ところで、[Cl]D と [Cl_{exp}]D のどちらも持たない言語では、如何なる接語化も起こらないことになるが、接語化が欠如した言語にも脱焦点化の接語重複と類似性を持つ現象がある。最後にこのことについて触れておきたい。ロマンス語のスクランブリングについては3節で触れたが、日本語にも次のような短距離のスクランブリングがある。

- (56) a. 太郎は [_{vP} 大学で 数学を 教え] た。
 b. 太郎は [_{vP} 数学を 大学で 教え] た。

特殊なアクセントが置かれなければ、(56a)では「数学(を)」が、(56b)では「大学(で)」が焦点になるのが自然な解釈である。これは久野(1978)が述べる通り、動詞末尾言語の日本語では動詞が焦点でない限り、その次に文末に近い動詞直前の要素が焦点となる。基底語順の(56a)で焦点であったものが、スクランブリングにより *vP* 内での位置を変更され、(56b)では焦点でなくなっているというのは、つまり、脱焦点化が起こっているということに他ならない。*vP* フェイズの極辺に移動されたものが脱焦点化され前提解釈を与えられるという状況はバルカン諸言語の接語重複と共通しており、共に同一の統語計算が関わっていると見るのは合理的なように思われる。(56b)で *vP* フェイズ極辺に移動した目的語に対し、CP フェイズ主要部から[-Foc]が付与され、前提解釈が得られるのである。

これが正しいとすると、日本語ではバルカンの諸言語に見られたような脱焦点化の接語重複は可能だろうか。可能でないとすれば、それはなぜか。(56b)と同様に目的語を脱焦点化することを意図した(57)を見られたい。

(57) *太郎は [_{vP} それ(を)_i 大学で 数学を_i 教え] た。

(57)は少なくとも意図される解釈で非文である。その理由としては、完全解釈の原理(θ規準)あるいは表面的な二重ヲ格制約(Shibatani (1973))の違反が考えられる。何れにせよ、*vP* フェイズ極辺に目的語に対応するような代名詞「それ」を立てたとしても、重複した接語と解釈されることはあり得ず、空しい試みとなる。根本的に、日本語には、人称代名詞と同形で、NP補部を選択するような冠詞は存在しない。また、音形を持つ日本語の人称代名詞は、英語の対応物と異なり、動詞に接語として付着することもない。更に Fukui (1986)では、日本語の代名詞の範疇は D ではなく N とされる。[-Foc]は D に与えられるとすると、*vP* 極辺フェイズに移動する構成素が主要部 D を持たない限り[-Foc]は付与されず、脱焦点化も起こらない。日本語の代名詞が D であるか否かは紙幅の関係上、ここでは議論しないが、少なくとも形態的特徴から、日本語には[-Foc]を付与されて最小限に書き出されるような[Cl]D が存在しない。

英語においては叙実補文を含んだ構造が、3人称中性単数代名詞を伴っている場合、脱焦点化の接語重複に匹敵する現象であることが指摘された。これに対し、日本語の代名詞は英語の虚辞のように振る舞うこともなく、叙実補文を含む構造においても移動先で *it* のように書き出しが行われることを期待するのは困難だと思われる。なお、日本語にも叙実補文、非叙実補文の区別はある。日本語の補文はその節末に現れる形式が弁別的であり、基本的に叙実補文では「こと」または「の」が用いられるのに対し、非叙実補文ではこれらは用いられず「と」が用いられる^{12, 13}。

(58) 太郎は [花子が 遊び呆けている こと／の] を 嘆いた。

(59) 太郎は [花子が 遊び呆けている と] 思った。

「こと／の」補文は格付与の対象となるため、「こと／の」自身は補文標識ではなくいわゆる形式名詞と言え、複名詞句の主要部を占めると考えられる。この複名詞句を DP と仮定しよう。そこで、(60)のような接語重複を試みしてみる。

(60) a. *太郎は [_{vP} それ(を) (常に) [_{DP} 花子が 遊び呆けている こと／の] を 嘆い] た。

b. *太郎は [_{vP} こと／の (常に) [_{DP} 花子が 遊び呆けている こと／の] を 嘆い] た。

叙実補文を含む DP が移動先の *vP* フェイズ極辺で主節 CP フェイズ主要部から[-Foc]を受けて D のみ最小限に書き出され、移動元では補文 CP の書き出しが実現するならば、日本語でも英語と同様に叙実補文の構造で脱焦点化の接語重複が起こっていることになる。しかし、それは事実ではない。日本語では、移動先で専ら最大限に書き出されるしかなく、相補削除が(61)のように加わって、移動元ではコピーが音韻的に全く書き出されないのである。

(61) 太郎は [_{vP} [_{DP} 花子が 遊び呆けている こと／の] を_i

(常に) v [VP - CP 花子が遊び呆けていること／の]を_i 嘆い]] た。

以上のように、日本語にはバルカンの言語のような接辞重複は存在しないが、これは日本語が [Cl]D と共に [Cl_{exp}]D も持たないことに帰着される。

6. 結論

狭統語部門において、文はボトム・アップ式に組み立てられる。その際、目的語は最も早く動詞に併合され、(特に V-O 言語において) 文末の位置に配置される。意味語用部門では、他の理由がない限り、原則として文末に現れる要素が焦点、それに先行する要素は前提として解釈される。しかし、文末や先行といった線形順序に関する概念は本来、音韻部門のものであり、狭統語部門や意味語用部門のものではない。一般性の高い久野の(1)の原則もそのままの定義では維持され得ない。そのため、統語構造中、最も深く埋め込まれた要素に焦点解釈が与えられると捉え直す必要がある。基底の構造関係がそのまま保持されるなら、統語構造に最初に導入されている目的語が焦点と解釈されるが、目的語が常に焦点になる訳ではない。そこで、意味語用部門の要求に応じるように、焦点と解釈されるべきでないものは狭統語部門で埋め込みの最も深い位置からより浅い位置へと移動がされる。そのような移動が脱焦点化を導くのであった。脱焦点化のための移動先が vP 極辺となるのは、フェイズ理論から自動的に導かれた。つまり、一致を介した CP 主要部からの [-Foc] 付与が受けられる位置が vP 極辺なのである。

移動の結果、移動のコピーの具現の仕方において言語間で相違が見られる。バルカンの言語では接語重複、日本語やロマンス諸語ではスクランブリングと表出するのであるが、それについてはパラメタによる説明を提案した。当該言語に [Cl_{exp}]D が存在すれば、移動先で最小限に具現する虚辞的接語が許される。[Cl_{exp}]D の無い日本語では、脱焦点化の移動が移動先で最大限に具現せざるを得ず、スクランブリングとなる。[Cl_{exp}]D のある言語は更に(54)の接語重複パラメタについて、移動先の [Cl_{exp}]D の音韻素性以外を維持するか否かを選択する。音韻素性以外を維持するならば、CP 主要部から付与された [-Foc] も残留するため脱焦点化の接語重複となり、バルカン語に当てはまる。[Cl_{exp}]D のある言語でも音韻素性以外を維持しないならば、[-Foc] の残留はなく、接語重複はあったとしても脱焦点化とは逆の焦点化にしかならない。これはロマンス語の一部の方言に観察される。ロマンス語では [Cl_{exp}] を D に与えないこともできるとすると、移動先の vP 極辺で [-Foc] を付与されて最大限に具現し、日本語と同様、脱焦点化のスクランブリングが起こることが説明できる。また更に、バルカン語の接語重複と比較されるような現象が英語にも存在する可能性を指摘した。英語の叙実補文を含む構造において移動先で最小限に接語として *it* が、移動元で DP に埋め込まれた補文が書き出される。何れの場合にも、同じ方法による [-Foc] の付与が前提解釈に関与しているのである。

以上、本論文では異なる言語において、表面的な違いはあるもののそれ以上に共通した特徴がある脱焦点化という現象に関し、統一的な統語分析を試みた。主に扱った接語重複、スクランブリングとも限られた範囲のものを取り上げたに過ぎず、別の文脈で用いられるものに対してはほとんど光を当てていない。脱焦点化については文頭(節頭)に観察される話題化(topicalization)と区別して扱ったが、これらは実際に同一視されることもある。2つに違いが

あるとすると、それは主に狭統語部門、意味語用部門の何れに関係するのか、より明確にする必要がある。その他にも論じられるべき問題は多々あるが、今後の課題としておく。

注

*本論文の執筆に際しては、科研費（基盤研究(C)22520501）の助成を受けた。

1 情報焦点と対照焦点については、Kiss (1998)において(i)のようにその相違が述べられている。

(i) a. the identificational focus expresses exhaustive identification; information focus merely marks the nonpresupposed nature of the information it carries.

b. certain types of constituents, universal quantifiers, *also*-phrases, and *even*-phrases, for example, cannot function as identificational foci; but the type of constituents that can function as information focus is not restricted.

c. the identificational focus does, information focus does not, take scope.

d. the identificational focus is moved to the specifier of a functional projection; information focus, however, does not involve any movement.

e. the identificational focus is always coextensive with an XP available for operator movement, but information focus can be either smaller or larger.

f. the identificational focus can be iterated, but information focus can project.

2 Saito and Fukui (1998)では、スクランプリングの方向がパラメタ化され、言語によって左方向でなく右方向にも起こる可能性が論じられている。が、以下では Kayne (1994)以降の伝統により、スクランプリングを含め、移動は一般に左方向へのみ行われるものとする。

3 ポルテーニョ・スペイン語は、アルゼンチンのブエノスアイレスで話されているスペイン語の一方言である。

4 バルカン諸言語の接語重複は直接目的語、間接目的語の何れでも起こるが、特にアルバニア語の場合、間接目的語の接語重複は直接目的語のそれと異った文脈で起こるとされる。Kallulli (2008)によれば、間接目的語の場合は、接語重複ではなく目的語・動詞一致の可能性はある。ここでは、間接目的語のケースについては扱わず、直接目的語のケースのみを議論の対象とする。

5 なお、目的語移動は(i)に引用する Holmberg の一般化のように（助動詞を伴わない主節のみに）制限がされる。

(i) Object Shift cannot apply across a phonologically visible category asymmetrically c-commanding the object position except adjuncts. (Holmberg (1999: 15))

6 Papangeli (2000)では、ギリシア語で代名詞（完全形）と接語との間に形態的対応関係があることが指摘され、それを本論文とも通じる主張の動機付けとしている。下表は Papangeli からの引用であるが、太字部分が対応箇所を示す。

	FULL FORMS		CLITICS	
	<i>Gen</i>	<i>Acc</i>	<i>Gen</i>	<i>Acc</i>
1SG	emena(ne)	emena (ne)	mu	me

2SG	esena(ne)	esena(ne)	su	se
3SG <i>masc</i>	aftu	afton(e)	tu	ton(e)
<i>fem</i>	aftis	aftin(e)	tis	ti(n)(e)
<i>neut</i>	aftu	afto	tu	to
1PL	emas	emas	mas	mas
2PL	esas	esas	sas	sas
3PL <i>masc</i>	afton	aftus	tus	tus
<i>fem</i>	aftes	aftes	tus	tis – tes
<i>neut</i>	afta	afta	tus	ta

生成文法の文献 (Postal (1966)、Abney (1987)等) では、代名詞がしばしば決定詞と分類されるが、その意味においても決定詞に属す項目同士が形態的に共通しているのは自然なことと思われる。

7 叙実補文で問題となる前提については、語用論的要因も無視できないことは事実である。例えば、(i)の例のように、実際に前提とされるものが話者の判断に過ぎない場合もあることが、Green (1989)により指摘されている。

(i) Sandy doesn't realize [that Tennyson wrote the King James Bible].

8 Kiparsky and Kiparsky (1970)では、非叙実補文については(i)に示されるような主要部不在の構造を持った NP が提案されている。

(i) [NP [s that ...]]

9 Kayne (1994)は英語の関係節を含んだ複名詞句について、反対称性理論により次のように分析している。

(i) [DP the [CP picture_i that [IP Bill liked _{t_i}]]]

10 Chomsky (2001)によれば、vP 極辺への移動を駆動するのは EPP 素性であり、この素性の付与は随意的である。

(i) v is assigned an EPP-feature only if that has an effect on outcome. (ibid.: 34)

11 叙実補文の分析(43)は、補文標識 that の省略についても説明を与える。よく知られているように、英語の非叙実補文では that の省略が可能であるのに対し、叙実補文の that は省略が不可能である。

(i) John believes [(that) she has left].

(ii) John regrets [* (that) she has left].

Stowell (1981)に従って、CP が語彙範疇の補部である場合、that が省略可能であるとする。叙実補文の CP が(43)のように機能範疇 D の補部であるとする、that が省略不可能であることが正しく予測される。同様に補文からの摘出の際生ずるバリア効果も(43)から説明されると思われる。

12 Kuno (1973)によれば、一見、叙実動詞の補文と思われる場合でも、(i)のように「と」が用いられることがある。

(i) 太郎は [花子が 遊び呆けている と] 嘆いた。

(i)の補文は太郎が嘆いている命題内容というより、嘆きながら発した言葉を引用したものと言

える。したがって、この補文の末尾に現れている「と」は言わば引用標識と呼ばれ得るものであり、(59)の純粋な補文標識とは異なる。

13 Saito (1986)が観察するように、非叙実補文は主要部統率がされるとき、西日本方言では補文標識「て (=と)」の省略が可能である。

(i) ジョンが [自分が 天才や (て)] 思うてる (こと)

cf. [自分が 天才や * (て)] ジョンが 思うてる (こと)

これは丁度、英語の非叙実補文で *that* が省略できるのと平行的であり、構造的共通性が伺える (注 11 参照)。明白であるが、叙実補文の「こと／の (を)」は省略しない。

参照文献

- Abney, Steven (1987) *The English noun phrase in its sentential aspect*. Doctoral dissertation, MIT.
- Anagnostopoulou, Elena (1999) Conditions on clitic doubling in Greek. In: Henk van Riemsdijk (ed.) *Clitic in the languages of Europe*, 13-73. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Belletti, Adriana (2005) Extended doubling and the VP periphery. *Probus* 17: 1-35.
- Benveniste, Émile (1966) La nature des pronoms. *Problèmes de linguistique générale*, 251-266. Saint-Amand: Gallimard.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and form*. London: Longman.
- Bošković, Željko (2005) Left branch extraction, structure of NP, and scrambling. In: Joachim Sabel and Mamoru Saito (eds.) *The free word order phenomenon: Its syntactic sources and diversity*, 13-73. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In: Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A life in language*, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2008) On phases. In: Robert Freidin, Carlos Otero, and Maria Zubizarreta (eds.) *Foundational issues in linguistic theory: Essays in honor of Jean-Roger Vergnaud*, 133-166. Cambridge, MA: MIT Press.
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Farrell, Patrick (2005) English verb-preposition constructions: constituency and order. *Language* 81: 96-137.
- Fukui, Naoki (1986) A theory of category projection and its applications. Doctoral dissertation, MIT.
- Gierling, Diana (1997) Clitic doubling, specificity and focus in Romanian. In: James Black and Virginia Motapanyane (eds.) *Clitics, pronouns and movement*, 63-85. Amsterdam: John Benjamins.
- Green, Georgia (1989) *Pragmatics and natural language understanding*. Hillsdale:

Lawrence Erlbaum Associates.

- Harley, Heidi and Elizabeth Ritter (2002) Person and number in pronouns: A feature-geometric analysis. *Language* 78: 482-526.
- Holmberg, Anders (1999) Remarks on Holmberg's generalization. *Studia Linguistica* 53: 1-39.
- Holmberg, Anders (2002) Expletives and agreement in Scandinavian passives. *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 4: 85-128.
- Horn, Larry (1981) A pragmatic approach to certain ambiguities. *Linguistics and Philosophy* 4: 321-358.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic interpretation in generative grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jaeggli, Osvaldo (1982) *Topics in Romance syntax*. Dordrecht: Foris Publications.
- Jakobson, Roman (1971) Shifters, verbal categories, and the Russian verb. *Selected writings, vol. 2: Word and language*, 130-147. The Hague: Mouton.
- Kallulli, Dalina (1999) The argument-predicate distinction and the non-optionality of DO clitic doubling and scrambling. In: Kimary Shahin, et al. (eds.) *The proceedings of the 17th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 347-361. Stanford: CSLI Publications.
- Kallulli, Dalina (2008) Clitic doubling, agreement, and information structure. In: Dalina Kallulli and Liliane Tasmowski (eds.) *Clitic doubling in the Balkan languages*, 227-255. Amsterdam: John Benjamins.
- Kallulli, Dalina (2009) On the derivation of the relation between givenness and deaccentuation: A best-case model. In: Kleanthes Grohmann (ed.) *Explorations of Phase Theory: Interpretation at the interfaces*, 115-132. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kayne, Richard (1975) *French syntax: The transformational cycle*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kayne, Richard (1994) *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1970) Fact. In: Manfred Bierwisch and Karl Erich Heldolph (eds.) *Progress in linguistics: A collection of papers*, 143-173. The Hague: Mouton.
- Kiss, Katalin (1998) Identificational focus versus information focus. *Language* 74: 245-273.
- Kuno, Susumu (1973) *The structure of the Japanese language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』 東京: 大修館書店.
- López, Luis (2009a) *A derivational syntax for information structure*. Oxford: Oxford University Press.
- López, Luis (2009b) Ranking the linear correspondence axiom. *Linguistic Inquiry* 40: 239-276.
- McGinnis, Martha (2005) On markedness asymmetries in person and number. *Language*

81: 699-718.

- Melvold, Janis (1991) Factivity and definiteness. *MIT Working Papers in Linguistics* 15: 97-117.
- Papangeli, Dimitra (2000) Clitic doubling in Modern Greek: A head-complement relation. *UCL Working Papers in Linguistics* 12: 473-498.
- Postal, Paul (1966) On so-called pronouns in English. In: Francis Denneen (ed.) *Nineteenth monograph on languages and linguistics*, 177-206. Washington DC: Georgetown University Press.
- Reinhart, Tanya (1983) *Anaphora and semantic interpretation*. London: Croom Helm.
- Rezac, Milan (2006) The interaction of Th/Ex and locative inversion. *Linguistic Inquiry* 37: 685-697.
- Saito, Mamoru (1986) Three notes on syntactic movement in Japanese. In: Takashi Imai and Mamoru Saito (eds.) *Issues in Japanese linguistics*, 301-350. Dordrecht: Foris Publications.
- Saito, Mamoru and Naoki Fukui (1998) Order in phrase structure and movement. *Linguistic Inquiry* 29: 439-474.
- Schütze, Carson (1999) English expletive constructions are not infected. *Linguistic Inquiry* 30: 467-484.
- Shibatani, Masayoshi (1973) Semantics of Japanese causativization. *Foundations of Language* 9: 327-373.
- Sportiche, Dominique (1996) Clitic constructions. In: Laurie Zaring and Johan Rooryck (eds.) *Phrase structure and the lexicon*, 213-276. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Stowell, Tim (1981) Origins of phrase structure. Doctoral dissertation, MIT.
- Svenonius, Peter (2000) Impersonal passives and the EPP: A phase-based analysis. In: Arthur Holmer, Jan-Olof Svantesson, and Åke Viberg (eds.) *Proceedings of the 18th Scandinavian Conference of Linguistics*, 109-125. Travaux de l'Institut de Linguistique de Lund.
- Svenonius, Peter (2004) On the edge. In: David Adger, Cécile de Cat, and George Tsoulas (eds.) *Peripheries*, 259-287. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Zubizarreta, Maria (1998) *Prosody, focus, and word order*. Cambridge, MA: MIT Press.